

「神の武具を身につけて」

2022年8月21日

エフェソの信徒への手紙 6：10～20

佐々木 佐余子

エフェソの信徒への手紙も6章で最終回となります。第二コリント書にあるように、パウロは第3回目の伝道旅行の際、エフェソに3年間滞在しました。その時、パウロは「主によって、わたしのために門が開かれていた」と語っているごとく、エフェソでは大きな伝道の門が開かれていたけれど、反対者も多かったのです。しかし、その都度主から助けられて、ヨーロッパにまで伝道しエルサレムに戻りました。

パウロは6章において、親と子、奴隷と主人について、そして、前の5章21節では妻と夫について教えています。今から2000年も前の手紙ですが私自身は大変教えられます。人によってだいぶ違うでしょうけれど。妻と夫の関係、「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい。」ここの互いに仕える、というところがいいです。妻だけが仕えるのではないのです。パウロは何と平等の精神なのでしょう。珍しいですね。この当時にしては。きっとイエスさまの御心をいただいているのでしょう。親と子の関係、大抵子供は反抗期があり、親を困らせるのです。小学校5年から6年、そして、中学生頃親に盾突いて、いわゆるギャング・エイジになる子供が多いそうで、でも反抗期がない子供もいるらしいのですが、うらやましいと思います。内のはひどくて困りました。娘はそういうことはなくすんなり育って良かったのですが。奴隷と主人の関係、この時代戦争が多かったので奴隷が多くいました。昔は奴隷を引っ張って来て家電のように使ったのです。今で言う掃除機や洗濯機、お手伝いとして住まわせて使っていたのです。今は戦争があると殺してしまいます。どちらがいいのでしょうか。奴隷になったら過酷な生活があるでしょうが、いいご主人に当たったら幸福ですね。ここにあるようにクリスチャンのご主人に仕えたらどんなに幸せでしょう。パウロは言います。6章の5節「奴隷たち、キリストに従うように、恐れおののき、真心を込めて、肉による主人に従いなさい」と教えます。この奴隷はクリスチャンになった人です。ここには世俗にない家庭の模範が示されます。ローマの支配下では主人と奴隷は勿論同等ではないし、奴隷はその名の通り奴隷なのでした。主人と一緒に食事は出来ず、一日中寝る暇もなく働き、寝る時はどこかの隅で休むのでした。人権は勿論ないのです。ただ命令に従って働くのです。病気になればそのまま。ところがパウロはこう教えます。9節「主人たち、同じように奴隷を扱いなさい。彼らを脅すのはやめなさい。あなたがたも知っている通り、彼らにもあなたがたにも同じ主人が天におられ、人を分け隔てなさらないのです。」パウロはすごいことを言っています。あのローマでですよ、同じ主人が天におられると知っているのです。この言葉をローマ皇帝が聞いたら驚くでしょうし怒るでしょう。ローマ皇帝が神なのです。私の上に主人がおり、しかも奴隷も同じ主人を信じている、という構図。パウロの信仰は、この世の人にはわかりにくいです。でもパウロは皇帝を神とっていないのでクリスチャンの信仰から出た考えです。人を分け隔てなさらない神だから、主人もそうしなさいと教

えます。今から2000年も前の言葉とはとても思えない。画期的な信仰です。キリスト教は改めてこの世を改革する刷新する新しい教えだとわかります。週報にもありますが、19世紀に宣教師が渡来して宣教を始めました。彼らは主に武士階級に伝道したのです。ところがその20年後、救世軍という宗派が日本に布教したのですが、彼らは下層階級に主に布教しました。困窮者の救済など社会悪と戦い貧しい人の友となりました。宣教師はそのような2本立てで伝道したのです。それは共に相乗効果が出てよい伝道方法だと思います。思うに外国の宣教団は日本に一流の宣教師を送られたということです。そこに伝道に対する熱意と神に対する真実が現れます。今読書会では、文学を学んでいるらしいですが、これから学ぶ夏目漱石も英語の聖書を読んでいて、聖書に書き込みがあったり傍線が引かれていたりするそうです。キリスト者では無かったでしょうが、影響が多くあったことは確かでしょう。そのように知識層にも一般庶民にも聖書が読まれているのです。神を信じるに身分は関係ないのです。

使徒パウロは新しい秩序を教えています。現実の社会では全くない秩序です。先に神の言葉に与ったユダヤ人も神の言葉を知らない異邦人も、主イエス・キリストを信じることによって神の国の相続人とされ、一つの体に連なると教えます。この聖徒たちは、それぞれ召しに従ってふさわしく歩むように、奴隷もなく市民もなく、貴族もなく、男も女も、皆一つの御霊によって、キリストの体に結び合わされて生きるものにされていると教えます。そのころそのような発想をする人はいたでしょうか。奴隷には奴隷の苦しみがあり、市民には市民の、ユダヤ人クリスチャンや異邦人クリスチャンにはそのような苦しみがあり、使徒には使徒の悩み苦しみはあるけれども、でも一つの御霊によって生きるものにされている。私たちも同じですね。悩みのない人はいないと思います。でも主イエス・キリストに力を与えられて何とか生活している状態です。隣の芝生は青く見えるという譬があります。昔、神学生だったころ、牧会学の先生が言われていました。「日曜日に女性がきれいにお化粧して礼拝に見えるけれども、内面は心に悩みを持って出でられるのだ」と言われました。その頃は聞いて良くわからなかったけれど、だんだん分かるようになりました。本当に自分も含めてそうですね。何とか主イエス・キリストの御衣に触りたいと思って見えるのです。

今朝のテキスト（本文）に入ります。11節に「悪魔の策略に対抗して立つことが出来るように、神の武具を身につけなさい」と教えました。大分前に「ナルニア国物語」が大分読まれました。本屋さんに沢山並べられていました。今はあまり置いてないですが、C.S ルイスというイギリス人の作家が執筆した物語です。ルイスという人はキリスト教の伝道者でしたが、一時無神論者になった時もあったのです。33歳の時にキリスト教の信仰を受け入れプロテスタントに改宗したと言われています。彼の作品に「悪魔の手紙」があります。その小説は、大悪魔が小悪魔にどのようにして人間を悪に引きずり込めるかを教えています。大悪魔は言います。「人間というのは、半分霊を持っており、半分は獣と同じ生き物なのだ。霊としての人間は永遠の世界で生き、獣としては時間の中で生きている。その人の霊は神を目指して生きるけれど、獣としてはその都度変化し情念に囚われたり、友情を大事にしたり、

落ち込んだり張り切ったり、そういう上下運動を繰り返す。もし人が落ち込んでいたらその時、小悪魔は出番だ、人間というものは悪魔の食い物であり家畜だけれど、敵はこの場合神なのだ。神は人間を自分の子供にしたがっており従属させたがっている。神は満たされているから与えたいと思っているが、我々は空っぽだから奪いたいと思っている。だから、人間が落ち込んでいる時は一番のチャンスだ。人が元気な時に酒を飲めば、明日の活力になるが、落ち込んでいる時に酒を飲ませると気が晴れず深酒になる。その内アル中になっただけのものだ。その時罪に引きずり込むと成功する」と言うのです。悪魔の究極の狙いは人から信仰を奪うことなのだ、と手紙に書いているのです。これはルイスという人が書いた手紙の中の一部なのですが、言い当てていますね。エフェソ書に戻りますと、12節にこのようにあります。「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。」13節「だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかり立つことができるように、神の武具を身につけなさい」と教えました。パウロはわたしたちの戦いと言っています。この戦いの敵は血肉、つまり、人間ではなく、この世の思想、ローマの宗教、占星術、神々等を言っているのです。そういう勢力です。教会のかしらとなられた主イエス・キリストは十字架の贖いの死と復活によって、既に勝利されているのです。ですから、14節にあるように「立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい」と勧めました。敵の目的は人間から信仰を取り去ることなのだから17節にあるように「救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい」と勧めます。主イエスは悪魔の試みにあわれた時、神のみ言葉によって悪魔を退散させました。神のみ言葉が霊の剣なのです。そして、お互い友のために祈ることも結束を強めます。あのパウロにしても「私のために祈ってください」と言っています。あれだけの働きをした使徒は強いから立派だから祈らなくてもいいのだと思いきや、牧師もそうですが最も祈りを必要とされているのは使徒であり伝道者なのです。伝道者ほど悪魔に狙われている人はいないでしょう。ですから、パウロは「祈ってください」と懇願しています。

「神の武具を身につけて」という題ですが、ここで思い出すのは、前にも少しお話したのですが、ジョン・バニヤンの「危険な旅」のお話です。様々な試練を乗り越えて、やっと天の国に入ろうとしている時、思慮深い3人の娘たちがいろいろな武具を見せました。モーセの杖、サムソンが振り回したろばのあごの骨、ダビデがゴリアトを倒したときに使った石投げ器、ヤエルがシセラをやっつけた時に使った釘と槌、ギデオンがミデアンの大軍を敗走させたときに使ったラッパとたいまつ。それらを見せ、娘たちは甲冑をバニヤンに着せ、ヘルメットと胸当て、信仰の盾、剣、靴を履かせたのでした。「あなたが立ち向かおうとしているのは人間ではなく、恐ろしい怪物なのですから」と言って送り出したのです。クリスチャンは峠を越えてやっと天の門に辿り着きました。

私たちの信仰の旅路も山あり川ありですね。でもそのような旅路を神さまと一緒に歩いてくださるのです。一人で歩くよりも皆で賛歌を歌いながら歩けば楽しめ楽しいでしょう。

パウロは今、牢獄にいるけれど鎖につながれています。あの大ローマ帝国の囚人となっている人が、一体どこからそういう気力が生まれるのでしょうか。普通の人間だったらぺちゃんこになって祈る気力も失せ、手紙も書くどころではないでしょうに。パウロは言います。「最後に言う。主により頼み、その偉大な力によって強くなりなさい」と。強くなりなさいは、自分の力で強くなるのではなく、神のみ力をいただいて強くしてもらいなさい、という意味ではないでしょうか。パウロは偉大な力と言っています。偉大な力とは主イエス・キリストのことです。主イエス・キリストは十字架に掛けられた時は、まったく無力なナザレのイエスでした。あのころには見る影もなく貧相なただの人でしかなかったのです。ところが天の神はそのイエスを墓からよみがえらせてくださったのです。その偉大な力に、私たちも与らせていただき、神の武具を身につけて戦い抜きたいと思います。